

「ヤマトタケルの東征」

兄のオオウスノミコトが東征を辞退したため、ヤマトタケルに「東の方の十二の国々（伊勢・尾張・参河・遠江駿河・甲斐・伊豆・相模・武蔵・総・常陸・陸奥）にヤマトに従わない者がいる。将軍として東征すれば、皇位の継承を約束する。」と言いました。吉備のキビノタケヒコをお供にヤマトタケルの東征は決定し、天皇は、ヒイラギの木で作った長い矛を受けました。

ヤマトタケルは大和を出発。最初に伊勢神宮を参拝し、神々にお仕えになっている叔母のヤマトヒメに訴えました。「父の天皇は私が早く死んだ方がよいと思われているのでしょうか。」と嘆く。

ヤマトヒメはタケルをかわいそうに思い、天皇家の宝物の剣（つるぎ：スサノオノミコトが大蛇のヤマタノオロチを退治したときの刀）と、ひとつの小さな袋を授けて「もしあなたの身に危ないことがあればこの袋を開けなさい。」と渡しました。

元気になったヤマトタケルは伊勢を出発後尾張へ行き、各地方を統括した豪族の美しい娘のミヤズヒメと恋に落ちました。彼女の家に行き、父と約束した東征を終えた後、結婚することを約束して尾張を出発しました。その後、山や川の乱暴な神を沈ませ、大和にはむかう者を従えました。

草薙の剣（くさなぎのつるぎ）

東征を続け、相模の国（神奈川県）の国造達が「この野に住んでいる神はとても乱暴な神です」といいました。ヤマトタケルはその神を見に行ったところ、待ち伏せしていた国造達が、いっせいに火をつけました。大火はたちまちヤマトタケルを包み込みました。「チクショー。だまされた。」といい、伊勢のヤマトヒメから授かった袋を開けました。中には火打石が入っていました。ヤマトタケルは刀で草を切り払い、火打石で草に火をつけるとたちまち燃え広がり、向かい火となって鎮火しました。

ヤマトタケルは難を逃れて隠れていた国造たちを全員切り倒し、死体に火をつけて焼いてしまいました。

このことから、今ではその場所を焼津（静岡県焼津）といい、その剣を草薙の剣（くさなぎのつるぎ）といわれます。三種の神器のひとつとしてミヤズヒメの住む名古屋市の熱田神宮に祭られています。

オトタチバナヒメ

ヤマトタケルは東征を続け、走水海（現在の三浦半島から房総半島）を渡る時、海の神が波を起こし前に進むことができなくなりました。船に乗っていた妻のひとりのオトタチバナヒメが「わたしがこの乱暴な海の神を沈めるため、海に入りましょう。あなたは天皇と約束した任務を果たしご報告しなければなりません。」と海の上にごさを敷いてお乗りになり、次の歌を詠まれました。

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中(ほなか)に立ちて間ひし君はも

これも相模の国の野で燃える火の中で私の名を呼んでくださった愛するあなたのためですもの。

オトタチバナヒメは海に身を投げたため荒波はおさまり無事に海を渡りました。その7日後海岸にオトタチバナヒメの櫛が流れつき、愛する妻を失った悲しみに涙があふれ、お墓を作ってその中に櫛を納められました。ヤマトタケルは東征を続け、乱暴なエミシ（東日本の部族）や山川の悪い神を沈めました。東征を終えて西に向かうとき、足柄の坂の麓で、白い神鹿に変身した坂の神が近づき、食残しのねぎ

（ノビル）を投げつけると目に当たり死にました。ヤマトタケルは峠（今の足柄峠）に登り、今来た東の方角を見て三たび亡くなったオトタチバナヒメを思い出さういいました。「ああ、わが妻よ。」その後この東の国々のことを「あづま（吾妻）」と言います。ヤマトタケルは相模の国を出て甲斐の国（甲府市）にはいり、タケルに続き歌を詠んだ焚き火番の老人に感激し、東国造に任命した。

ミヤズヒメとの恋

ヤマトタケルは甲斐の国から信濃の国に行き信濃の御坂峠で坂の神を服従させ、現在の木曾路を歩いて、結婚の約束をしたミヤズヒメの待つ尾張の国（現 愛知県西部）にもどり、再会を果たしました。ミヤズヒメは無事に再会できてとても感謝し、大きな杯でヤマトタケルの活躍を祝福されました。ヤマトタケルは長い戦いの疲れを癒されるおもてなしに感激し、二人は結婚されました。

伊吹山の白イノシシ

ヤマトタケルはミヤズヒメの家に草薙の剣を置いたまま伊吹山（滋賀県と岐阜県の県境の山）の神を退治するため出発しました。伊吹山に登りはじめてまもなく白い大イノシシが現れました。タケルは上の神の使いと無視したが、実際は神の化身で大氷雨を降らしたため仕方なく下山し、「居醒の清水」

（現米原町醒ヶ井 平成の名水百選）で休まると少し元気になりました。居醒の清水を出発し、当芸野（岐阜県養老町）までこられ、こうおっしゃいました。「私の心はいつも空を飛んでいくような思いであったのに、私の足も歩けなくなって、たぎたぎ（たどたど）しくなった。」それでこの地を当芸（たぎ 現：養老町多岐）というようになりました。四日市市内の坂道まで来ると「とても疲れた」とおっしゃり、杖を突いてやっと歩ける状態になりました。その坂道を杖突坂（四日市市采女の旧東海道にある坂）といわれるようになりました。